

序章 テイリチミールの白峰― 再会

再会

一九八四年五月二十五日、私はパキスタンのイスラマバード空港に降り立った。JOCSS(日本キリスト教海外医療協力会)より派遣され、パキスタン北西辺境州のペシャワールで医療協力を行うためである。私の主たる任務は、この北西辺境州政府の“らいコントロール計画”に民間側から強力な側面援助を撃ち込むことにあった。

飛行機を降りると、吹きつけてくる熱風やシャルワール・カミーズ(国民服)をまとって歩き回る人々の喧噪がたまらなく懐かしく感ぜられた。ふと一年前、二年前、三年前……とこの国を訪れたときの印象が連続してよみがえってくる。この一年の日本や英国での研修生活が、今の世界とは無縁な、何か夢のような空白に感ぜられるのである。この一年間何をしていたのだろう。まるで六年前の最初の訪問以来、ずっとここで生活してきたような錯覚を覚える。

到着後数日間は滞在手続きその他でイスラマバードの役所を駆けずり回り、五月二十八日にめざすペシャワールに到着した。ハイウェイで約3時間の道程である。暑い。強烈な陽光の下に、草も木も家々も、のろのろと歩く人や馬車も、みなうなだれるように、光と陰影の世界にのみこまれる。

胸の躍る思いをおさえてペシャワール・ミツシヨン病院の門をくぐる。顔なじみのスタッフの前でサングラスをはずしてみせると、一瞬まるで亡霊でも見るかのように驚いた顔が、急にほころんで笑顔となり、抱きついて再会を喜んだ。そして皆に報告にとんでいった。

らい病棟も、古いムガル様式の墓を改造したチャベルも、スタッフたちも、全て変わりがなかった。昨年来、病院では私がまもなく来るといふ誤報がとび交い、首を長くして待っていたとこのことである。らい病棟では、古い患者たちが眼を輝かせて抱きついてきた。2ヶ月前に配属されたというドイツ人のシスターが病棟の責任者になっており、この白髪まじりの長身の看護婦は、小柄な私を見下ろしながら嬉しそうに迎えてくれた。病棟ではらいを専門に見てくれる医師が、心細かったのである。

しかし、患者もスタッフも、ペシャワールの雲一つない青空のように陽気で明るかった。私はまたやってきたというよりは、帰ってきたのであった。変形して崩れたらい患者の手先の、ごつごつした手触りを何度も懐かしく確認した。彼らの無邪気な笑顔を見るだけで、日本でのつまらぬ議論も人間関係の杞憂もふきとんでしまった。この笑顔を見るためにわざわざやってきたような気がした。後のことはささいな、どうでもよい事のように思えた。

